



つたのみ日記(4)

坂元彦太郎

入園したばかりの三才児のひとりが、先生に抱かれてしがみついたままで「ママ、ママ——」と泣いている。外の幼児たちは、きょんとした顔で、めいめい、砂場で自分の前にある砂をいじって遊んでいる。典型的といってもいい「平行的」な遊びである。

その外にもひとり、入口のところ立って、やはり「マン、マン」とないでいる。泣いている子は、双方とも向かいあっていて、ちらちらとも一人の方の様子を、うかがってはなしている。先生は、一方は抱いている腕で体温を通わせながら、離れている子とは視線でつながっている。

入園したばかりの時には、ざらにある風景であろう。母と別れかねて、母を慕って泣くのではあるが、いつの間やら奇妙なことが起りかけている。抱かれている子はマンというこぼれを、少し離れた空間を

めがけ発しているが、しだいに、しっかりと先生にしがみついている力を強めていっているのである。

もし、これと対抗的にもひとりの子が、さらに声高く泣き声をあげなかつたら、もうすぐ泣きやんで先生の胸に顔をうずめたであろう。そうなる前に対抗者ができてしまった。なかなか、やめられなくなった。

しかし、二人は、自分の母親を呼んでいながら、しだいに、それがそこにいる先生にふりかかりかけているのである。先生は、その均こうの間にあつて、身動きもできず弱ってはいるが、もうすぐ、このこどもたちが自分のものになる予感で、自分が泣き出したくなった気持ちを支えられるようになってきている。

——その夜、私は、パブロ・カザルスを見た。彼は、愛弟子である、平井丈一郎の故国でのデビューのために、わざわざオー

ケストラを指揮に日本にやってきたのであった。カザルスといえば、現代の各界にわたって最高の一人であつて、政治的な理由でイギリスや日本などには来ないことを言明していた。あの深いセロの音色に現われるカザルスの人間味にあこがれて、私は、せめて見るだけでもと思つて、日比谷公会堂の一隅に席を占めた。

カザルスが少し腰をまげて、八十四才とは思えない足どりで先頭に立ち、すぐつづいて平井がでてきた。指揮台にのぼろうとする老師を、すばやくセロと弓を左手にもちかえて、右手で抱きかかえるようにして助けた、平井の若々しさも好ましかった。演奏がおえるやいなや、カザルスは元気でひとりでおいて、弟子の肩と顔をかかえるようにして、ねぎらつた。何かいっただえらう。しかし拍手は万雷のように二人を包んだ。

その時、私はその昼に見た、先生が泣いている三才児を抱えている姿を、思いうかべた。そして、それが、このカザルスと弟子との抱き合いの上に、二重写しに見えるのであった。